

湿った重い雪で雪害多発

防災科学技術研究所・雪氷防災研究センター（新潟県長岡市）は14日、弘前市の県弘前合同庁舎で、中南部地域の自治体職員らと今冬の雪害状況を議論する勉強会を開いた。中村一樹センター長は弘前大学大学院理工学研究科と合同で行っている雪害調査の結果を報告し「今冬は湿った重い雪が大量に降り、除排雪が難しくなったほか、リンゴ樹の枝折れや家屋への被害が目立った。一方、青森が大雪だった12月に新潟では大雨警報が出るなど、温暖化による影響が垣間見える冬だった」と語った。

（工藤貴光）

合同調査は昨年12月から、災害救助法が適用された県内10市町村と西目屋村を対象に行っている。3月中も調査を続け、今後改めて結果を報告する予定。勉強会を共催した同研究科寒



今冬の雪害状況や今後の対策を議論した勉強会14日午後、県弘前合同庁舎

防災科研、弘大が報告

地気象実験室の石田祐宣准教授（気象学）は湿った重い雪が降った要因に気温の高さを挙げた。弘前では雪が多かった2012～13年の冬（12～2月）に比べ、今冬の平均気温は約2度高かったとし「雪に含まれる水分の量が増え、湿った重い雪が降った。温暖化が進んだらどうなるかが示唆される冬だった」と述べた。また、今冬は一度に大量の雪が降る「ドカ雪」が多かったとも指摘。「原因について調査を進めたい」と語った。勉強会終了後、中村センター長は取材に「従来のように雪の深さだけで評価しても、（雪害の実態は分からない。雪の重さや乾湿など雪質の変化も定期的に調査する必要がある」と話した。

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科 E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp